

下程勇吉著 『廣池千九郎の人間学的研究』
刊行にあたって

大澤 俊夫

このたび、故・下程勇吉先生の大著『廣池千九郎の人間学的研究』が、めでたく出版されました。下程先生は日本の教育学の泰斗であり、教育人間学の先駆的な学者であります。本書は、下程先生が、昭和四十九年四月にモラロジ―研究所研究部の顧問に就任されて以来、二十数年にわたり、『道德科学の論文』（全四冊）、『廣池千九郎日記』（全六冊）をはじめとする、廣池博士の諸著作や『廣池千九郎博士資料集』（全百四十八冊・未刊）を、丹念かつ、つぶさに読破されたうえ、深い思索を重ねながら、まとめられたものです。

かつて、廣池博士生誕百年記念の折には、その主事業として、同志社大学教授の内田智雄先生を中心に、京都大学教授の森鹿三先生、慶応義塾大学教授の利光三津夫先生など、多くの碩学のご協力によって、『東洋法制史序論』、『東洋法制史本論』、『中津歴史』、『支那文典』や『大唐六典』、『和漢比較律疏』など、モラロジ―を創建する以前の廣池博士の歴史家、法制史家、文法学者としての卓越した業績を再評価することができ、その成果である『廣池博士記念論集』（昭和四十二年六月刊）を世に問うことができました。

そして今回、下程勇吉先生の手により、モラロジ―創建という廣池博士の一大業績を、日本精神史の中に

位置付けていただいた、「廣池千九郎の人間学的研究」が上梓できましたことは、モラロジー研究所にとっても、一門弟の私にとっても、この上ない喜びです。本書を、今は京都東山の裾野にある小野小町ゆかりの随心院に静かに眠る、下程勇吉先生の御霊に捧げます。

下程先生は研究部に在任中（昭和四十八年四月から没年の平成十年三月までの二十五年間）、本書の四倍以上にも及ぶ分量のモラロジーに関する論文を書き残されました。実に二十数年に及ぶモラロジー研究の結果、平成八年発行の『日本の精神的伝統』（麗澤大学出版会刊）において、「日本倫理を貫くもの、それは誠である」と喝破され、第一章で「神道的系譜」、第二章で「仏教的系譜」、第三章で「儒教的系譜」を辿られたうえで、最後の第四章を「世界的普遍的視野の系譜」とされ、人類普遍道徳の提唱者として、廣池千九郎を位置付け、その独創的な最高道徳論を「廣池千九郎の人類普遍道徳体系」として展開されたのです。

先生はこの間、専門の教育人間学のお立場から、「二宮尊徳の人間学的研究」、「吉田松陰の人間学的研究」、「中江藤樹の人間学的研究」（いずれも麗澤大学出版会刊）という、大部の著作を相次ぎ刊行されましたが、それら日本思想史の核である人物の思想と実践を生き生きと跡づけられたうえに、晩年の全精力を傾けられたのが、この最後の大論文「廣池千九郎の人類普遍道徳体系」であります。

今回出版の「廣池千九郎の人間学的研究」はこの大論文を中心に、下程先生がモラロジーの核心原理とお考えの「神の原理」のほか、主要論文、講演集などの中から、今日的にきわめて重要な意味を持つ研究の成果を一書にまとめたものであります。

特に読者の精読を請う「三つの点」

本書を読み進めるに当たっては、とりわけ次の三点にご注目いただきたいと願っております。

第一点目は、廣池博士が最高道徳的自覚を得られるまでの精神的軌跡です。青年時代から猛烈な勉強を重ねられ、独学で、ついに最高の榮譽である法学博士の学位を東京帝国大学から授与されました廣池博士も、いつかやがて「通れぬ日」が来ることを予感されておりました。果たして大正元年十二月、廣池博士は、ついに死を宣告される事態に立ち至ります。下程先生はこの事態を「第一次恩寵的試練」（五九ページ）と言われ、表されておりますが、廣池博士は「無我の愛という己を捨てることなり。己を捨てるとは、己れの生命、財産、自由をすてて、人類の幸福に資することなり」と神に誓うことで、大病を乗り越えられました。

しかし大正四年四月、廣池博士は、学者の命とも言える蔵書も、自由も捨てて身を投じた天理教教団の職を追われるという、耐え難い試練に直面しました。下程先生はこれを「第二次恩寵的試練」（六八ページ）と位置付けられ、その試練の中で、廣池博士は「慈悲寛大自己反省」の精神を悟得され、博士のいわゆる最高道徳的自覚をなさったのだと、まとめられております。本書には、その試練の内容と、廣池博士のお受け止め方、そして、聖人の教えをもとに、最高道徳的自覚に到達され、それを乗り越えていく、廣池博士の「精神のプロセス」がみごとに描かれています。

二点目は、廣池博士が提唱された世界の五つの道徳系統についての解明です。廣池博士は、ソクラテス、イエス・キリスト、孔子、そして仏陀のそれぞれを中心とした世界の道徳系統に、日本のご皇室の太祖・天照大神の事蹟を源とする道徳系統を加えた、五つの道徳系統に一貫する「人類普遍の倫理的原理」を究明され、遂に最高道徳の体系を確立されました。

本書で、下程先生は、廣池博士を「東西五大聖人に発する人類普遍の倫理的原理の究明に七十二年の生涯を捧げた、明治・大正・昭和三代の代表的日本人の一人」(九ページ)とされ、「東西の精神の相会する普遍の倫理的の地平において、最高道徳学の体系を確立して、人心の開発・救済に挺起する道を一以って貫いた」(同前)と評されており、そこに至る東西思想研究の過程が明瞭かつ簡潔に展開されているのです。その意味で、下程先生の五大聖人論(七〇―七三ページ)に注目してお読みいただきたいと思えます。

そして第三点目は、下程先生がいうところの「最高道徳的心情の構造」についてです。下程先生は、京都大学の大学院時代から、ドイツの現象学者・フッサールの研究に取り組まれ、また、西田幾多郎先生門下の学者が西欧の代表的哲学者をそれぞれ執筆した『西哲叢書』において、『フッセル』を担当執筆されています。先生は哲学における現象学的方法を極めておられました。

廣池博士は『道徳科学の論文』の第一巻第一章の書き出しにおいて、モラロジーを「因襲的道徳及び最高道徳の原理・実質及び内容を比較研究し、且つ併せてその実行の効果を科学的に証明せんとする一つの新科学」と定義しておられますが、下程先生は、廣池博士がその現象学的手法をもって、道徳的心情の本質構造を明らかにされた点にも注目され、「他に比類を見ぬ」(七九ページ)と評価をされたわけです。

廣池博士は、従来の普通道徳には限界・弱点・病弊があると鋭く指摘され、いくら奮励努力・力行・克己・忍耐・熱心を行うも、その核心は利己心を脱せぬ「高き固き狭き心」にほかならないと喝破され、聖人に共通普遍する、神に通じる慈悲中心の「低い柔らかな広い心」へと心を立て替えることの必要性を説かれましたが、このように廣池博士が最高道徳的心情を具体的に平明に記述した例は、著作のいたるところに見受けられます。一例をあげれば、本書にも「大きな、はるかな、つなぐ心」「氣永く且つ温かき慈悲の心」

「春の日ののどかなような、春の海の広く、秋の月の冴え渡りたるがごとく、得もいわれぬような心使い」(七九―八〇ページ)等々であります。下程先生は、こうした現象学的記述に着眼され、そこから最高道徳的心情の構造をつぶさにわかりやすく解き明かしておられます【筆者注、本書「第一部 人間学的研究」内「四 普通道徳の限界」の「熱心の弊」(三五ページ以降)、および「五 恩寵的試練」の「第二次恩寵的試練」(六八ページ以降)は本書の圧巻部分と思われる。したがって、本書においては、下程先生が着目された、そうした最高道徳的心情の記述にもよく注意をして、お読みいただきたいと思えます。

本書を道徳国家・日本再生の礎に

廣池博士は、大正四年の困厄に際して、「私には金もなく、書籍もなく、一人の知己もなく、一人の味方もなく、真に神経衰弱で弱り切つて日々五、六分の発熱を続けておる弱い肉体ただ一つ、すなわちいわゆる裸一貫の身であったので、あたかもイエス・キリストが十字架に磔けられたときと同じ有様でありました」(七〇ページ)と述べられているように、イエス・キリストを範として心の立て替えに挑まれました。

また大正十二年には「幹堂の号、改めて蘇哲とす。これはソクラテスとクリートンとの問答に本づき、ソ氏の品性を継承することに決す」(七一ページ)との記述も残されており、まさに諸聖人の教えを自己の求道の目標とし、かかる困難・難局を突破し、最高道徳的な立場に到達されました。

このように本書において、廣池博士の独自の道徳思想と類稀な実行の跡を明らかにされた下程先生は、廣池博士の畢生の名著『道徳科学の論文』が「世界の倫理道徳の古典文献に伍しても、堂々とその存在理由を主張しうる」(二七三ページ)と述べています。特にその決定的な内容として、「自己の運命の成立せる原因を

自覚し、併せてその運命の全責任を自己一人にて負う」という精神と、「一つの念い一つの行いも、仁恕を本となす」という精神を挙げられ、それぞれを「運命自覚の原理」「仁恕の原理」と要約されています。

さらに下程先生は、こうした廣池博士の人間学的研究の総括として、「廣池千九郎の最高道德の原理なるものは、実にノースロップの『東西精神の会合』(F. S. C. Northrop, *The Meeting of East and West*, 1946)にいわゆる「一切を包括する原理」を、彼に先んずること二十年にして提唱した果敢な日本人の独創的成果として、評価せられるとともに、日本の近代化の窮極課題である人類的普遍的道德の確立に対する先駆的業績として、その歴史的意義は不朽である」(九五ページ)と高い評価をされています。

倫理・道德の再生が日本の国民的課題として問われている今こそ、私はぜひ本書を、モラロジアンはもとよりのこと、広く日本の言論人・教育者・識者の方々も玩味され、日本の道德的再生と混迷を深める世界平和構築のよりどころとされまことを、切に願ってやみません。

なお、本書の読み方としては、まず初めに、第三部「小品集」の「母を憶う」と「ちちはは」から読み始められ、下程先生をお育てになった、ご両親の人物像や、親子の情愛にふれ、下程先生の人となりをよくご理解いただきたいと思います。そして次に第二部の「講演集」、とりわけ「人生への出発」「モラロジの核心」を読み、最後に、本書のもっとも重要な実質である第一部の「廣池千九郎の人間学的研究」へと読み進めていただければいかかと思えます。

最後に、下程先生は「廣池千九郎の人類普遍道德体系」の大論文の最後を次のように結ばれました。「孔子は「吾が道は一以ってこれを貫く」として、「仁恕の道」を説いているが、実に廣池千九郎も終生、群馬・大穴の地において生涯を閉じるまで、「仁恕」を一以って貫き、身をもって実践躬行したのであった」

(九六ページ)。

私は、下程先生は「廣池千九郎」というこの不世出の偉大なる人物と、真摯に対峙し、迫真の対決をしたのだと思っておりますが、下程先生が、そのように廣池博士に心底から傾倒し、真理の探究者、仁恕の体現者となられる過程を心を込めておまとめいただいたご至誠、真心に深い深い感謝の誠を捧げたく存じます。

(平成十七年正月記)